河本 陽詩（兵庫県立須磨東高等学校）

単元名：ペルーの日系社会を通して「私たち」を考えよう		
氏名：河本 陽詩	学校名：兵庫県立須磨東高等学校	
担当教科：英語	実践教科：英語コミュニケーションⅡ	
時間数：2時間	対象学年：第2学年	人数：41人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

・“people who create a meaningful bridge between Japan and the world”の一例として、ペルーと日本をつなぐ日系人について知り、理解を深める。

・日系人や日本に住む外国人を取り巻く状況に意識的になり、国際社会の一員であるという自覚を育む。

【2】単元の評価規準	（ア）知識・技能	ペルーの日系社会や日系人について、与えられた資料や自分で調べた情報を元によく理解し、今までに学んだ知識や自分自身の経験と結びつけて考えることができる。
	（イ）思考・判断・表現	日系社会の歴史や日系人の暮らしに関する資料や写真、ケーススタディを通して考えたことを、ワークシートにまとめたり、グループ内で述べたりできる。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	ペルーの日系社会や日本国内の多文化に興味を持ち、意欲的に学ぼうとしている。グループワークにおいてはコミュニケーションを図りながら、多様な意見に耳を傾け、他者とともに学ぼうとする姿が見られる。

【3】単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

英語コミュニケーションⅡでは、アイルランド出身の詩人ピーター・マクミランについて学んでおり、百人一首を英語に翻訳する際の苦労や工夫が述べられている。日本文化を世界中の人に広く知ってもらおうとする彼は、まさに日本と世界の架け橋である。

授業者はペルーでの経験を通して、日系人という存在もまた、日本とペルー（世界）をつなぐ架け橋だと考えた。“There are some people who create a meaningful bridge between Japan and the world.” という教科書の本文を手掛かりに、番外編として本単元を設定した。ペルーの日系社会についてまずは知り、そこから現代の日本社会における多文化共生について考えていく。

神戸市に位置する本校の生徒にとって、街中で外国人を見かけることは頻繁にあっても、直接関わる機会は少なく、あくまで「他人」という距離感のようである。ただ、海外への興味を持つ生徒は多く、将来、留学や外国語学部への進学を考えている生徒もいる。ケーススタディを活用して日本に住む外国人の立場から問題点を考えてもらい、多文化社会の担い手として、周囲の人への思いやりを持ち、想像力を働かせることができるようになることを期待する。

また、日系人や外国人を取り巻く環境に関連して、出入国管理及び難民認定法（以下、入管法）も取り上げることとした。本校にはリーガルマインド類型が設置されており、常日頃から、物事を多面的に捉える力や、法を活かして社会の調和を保ちながら暮らす力を育むことを目指している。昨今の日本社会における国際化の背景のひとつには、入管法の改正が大きな影響を与えていることに気づいてもらいたい。

【4】展開計画（全2時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	[テーマ] ペルーの日系社会を知ろう [ねらい] ①地球の裏側にある国に、多くの日系人がいることを知り、その背景に興味を持つ ②ペルー移民の歴史を学んでいくにあたり、想像力を働かせる	○ピーター・マクミランの他に日本と世界の架け橋として活躍する人にはどのような人が挙げられるかを考える ○ペルーのイメージを全体で共有 マチュピチュ、アンデス山脈、アルパカなどを確認 ○日系人デイサービスセンターでのレクリエーションの動画を見る →気づいたことをワークシートに記入、班内で共有 ○日系人について知る・理解する 人数や国の分布、なぜペルーに日系人がいるのか、資料を読む ○移民の気持ちを想像する 1　気持ち 2　その理由 3　持っていくもの 4　渡航までの間、何をするか 以上の4点をワークシートに書く。班内で共有 ○ペルーの日系社会について →フジモリ大統領や日系人協会の活動を知る ○NIKKEI料理（フュージョン料理）について →iPadを用いて各自で調べる	・ペルーに関連する写真 ・お土産の品 ・ペルー日系人協会（APJ）デイサービスセンターで撮影した動画 ・外務省「日本と中南米をつなぐ日系人」 ・海外興業株式会社の移民宣伝ポスター
2 本時	[テーマ] 日系人や在留外国人が抱える課題について考えよう [ねらい] ①現代の日本で暮らす日系人や在留外国人が抱える課題に意識を向ける ②日本にいながら、自分たちも国際社会の一員であるという自覚を持つ	○日系移民の歴史と神戸の関わりを知る 神戸港移民船乗船記念碑を見てどこにあるものか考える →BE KOBEモニュメントの写真で場所を確認 ○移民の苦労と日系社会の発展について知る →資料1～4を読んでWSに考えを記入 ○フォトランゲージ →日系人家庭で撮影された写真を見て気づいたことや感じたことをできるだけ多くWSに記入 ○入管法について →日本滞在ペルー人およびブラジル人の人数の変遷を知る ○ケーススタディ（日本で働く日系ブラジル人） →班で資料を読み、各自でワークシートに記入 班内で意見を共有する	・写真 ・ワークシート1&2 ・写真 ・JICA九州「多文化共生ってなんだろう?」WS（ケーススタディ4）

【5】本時の展開

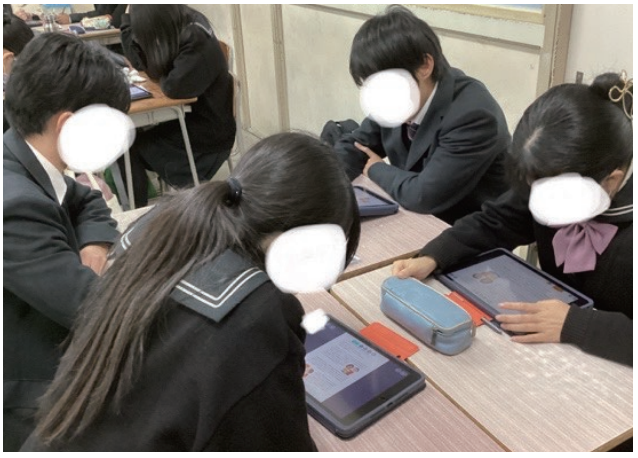
過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	○前時の復習 ○日系移民の歴史と神戸の関わりを知る	・ペルーへの移民開始年や日系人の数を確認させる ・神戸港移民船乗船記念碑（希望の船出）とBE KOBEモニュメントの写真を示す →国際都市・神戸は日系人とも関連があることに気づかせる	・写真
展開 ① (25分)	○移民の苦労と日系社会の発展について知る ・ワークシート1の資料1～4を読む ・ワークシート2に考えを記入	・個人で資料をしっかり読むように促す ・資料が難しそうであれば、適宜説明を加える	・ワークシート1&2
	○フォトランゲージ（ペルーの日系人家庭での写真から） ・気づいたことや感じたことをできるだけ多くWSに記入	・紙媒体で写真を配布する ・細かな点でもいいので、どんどん書き出していくように促す ・全体共有後、追加で日系人に関する情報を提示する	・写真
	○日系人と入管法の関係を知る	・1990年の入管法の改定以降の日本滞在ペルー人およびブラジル人の数の増加に注目させる	・『ペルーを知るための66章』 ・出入国在留管理庁資料 ・JICA九州「多文化共生ってなんだろう?」ワークシート（ケーススタディ4）
展開 ② (15分)	○ケーススタディ 日本で働く日系ブラジル人 ・班内で声に出して資料を読む ・ワークシートに各自で考えを記入 ・班内で意見を共有する際、自分になかった考えは青色で加筆	・日系人に限らず多くの外国人労働者が似た問題を抱えうることを伝える ・ロイロノートで提出してもらい、いくつかの意見を全体で共有	
まとめ (5分)	○本時の感想を記入しワークシートを提出	・ロイロノートで提出	

【授業実践の様子】

導入 神戸港移民船乗船記念碑の写真を見ている様子

展開① フォトランゲージ　班に1枚渡された写真をみんなでよく観察し、盛り上がっていた

展開② ケーススタディ　ワークシートの事例を読んでいる様子



【6】本時の振返り

神戸港移民船乗船記念碑の写真を「どっかで見たことある!」という声が意外にも多く上がった。メリケンパークにあると明らかにすると「確かにあるわ」「見たことある気がする」「全然わからん」などと話していた。導入として、南米移民の歴史を身近なものとして捉えることができたようだ。

ワークシート2で【資料3】にある「日本人の持つ連帯の精神と組織力」とはどのようなものだと思うかを聞いた際には「体育会で自分の組のために戦ったり応援したりして一致団結する」「集団行動や整列」といった例が出てきたほか、「男子バレーボール日本代表の強さは日本人の団結力にあると言われている」といった例を出した生徒もおり、ペルーに渡った日本人たちが辿ってきた歴史と自分たちの間に通じ合うものを感じられた様子だった。

フォトランゲージでは、班内でとても活発にコミュニケーションをとって、授業者が気づいていなかったような隅々にまで目を光らせて観察していた。現地の生活の様子を知り、想像力を働かせ、自分たちとの共通点と相違点の両方を見つけており、異文化に触れる上でとても有効な手法だと感じた。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

たった2時間の授業だが、日系社会について理解を深め、地球の裏側の国でありながらペルーを身近に感じることができたようだった。それぞれの立場から気持ちや状況を想像し、クラスメートと活発に話をしながら、提示された問いにしっかりと向き合っていた。以下、授業全体の振り返りの生徒記述を大きく3つの項目に分けて引用していく。

1.日系社会や日本の文化に関するもの

•日系人が日本の文化や言語をたとえカタコトでも難しい日本語が使えなくても大切にしてくれることが嬉しいなと思いました。

•昔の日本人が他国へ移住し、慣れない環境の中で一生懸命働き、そこで築き上げてきたものが現代にしっかりと残り、受け継がれているのを知り、自分も日本の大切な文化をしっかり繋げていこうと思いました。

•整理整頓とか日本でよく聞く言葉があったり苗字が日本語だったり、知らない国だけどなんとなく日本っぽい感じがして行けるなら行ってみたいなと思った。他にも日本の文化を大切にしてくれている国があるんだったら知りたいし行ってみたい。

•キリスト教だけど先祖は仏教スタイルで奉るというのは宗教が混在しまくっている日本人から見ると割と軽い反応になりがちだけど、欧米のキリスト教一本の国から見るととんでもないことをしていると思われるはずなので、それだけ器用にできるのも日系人ならではなのかなと思いました。

2.移民の努力と困難に関するもの

•悪環境でも差別に負けず日本人としての誇りを持ち、労働環境を確立したのは本当に尊敬しかないです。日本人の連帯の精神と組織力がペルーでも浸透しているので、自分も日本人としてこの心を持ちこれから生きていきたいです。

•昔、ペルーなどの南米に移った人は何もわからないなりに努力して生活したのだなと改めて感じました。さらに今の日系人はその先祖に感謝しながら生活していてすごい心がけだと思います。

•一番印象に残っていることは、ペルーに行っても日本の考えや価値観を大切にしていて、それを代々受け継いでいるからこそ今も残っているということです。私がもし、外国に急に行かされて、同じ立場におかれたら不安と困惑で日本の考えよりもその国の文化にのまれてしまうと思ったから、当初ペルーに行った人たちが苦難の中でも自分たちや今まで暮らした日本を大切にしている考えがすごく素敵だなと感じました。

3.差別の問題意識と共生の大切さに関するもの

•外国人に接する時こそ、日本人が持っている思いやりや連帯の精神を示すべきだと思いました。

•個々の特徴を尊重して日系人に関わらず人を卑下するような偏見・差別がなくなって海外の人が住みやすい国をつくるべきだと思いました。

•夢を叶えるために異国の地で異文化を受け入れて、奮闘する姿に心打たれた。日本も外国人を手厚くサポートする仕組みをつくったり、気軽にコミュニケーションをとってあたたかく受け入れる態勢をとればよいと思った。

•これからも日本に興味を持ってくれたりする日系人などはまだまだたくさんいると思います。そんな人たちを自分や国が温かく迎えられるようになればいいなと思います。

•日系人という言葉は聞いたことがあっても、実際の生活感やその人たちの考え方などはなかなか知る機会がないので、もっと国際交流していろいろな話を聞いて知りたいと思いました。授業の最後に取り組んだヒカルドさんの問題については、とても難しいことだけどコロナ禍や現在、日本で多くの人が直面している問題だと思うので、もっと社会全体で考えられるべきだと感じました。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

教科書で日本文化を海外に発信する外国人について学習していたため、日本文化が海外でも親しまれていることへの驚きや喜び、日本の良さを改めて認識したと言及する生徒が多かった。海外で日本語がどのように学ばれているかについて興味を持った生徒もいた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

（授業前）

国際理解講演会やJICA海外協力隊のOBの方のお話を伺う経験を通して、途上国や異文化に関する知識は多少身につけていた。しかし、どこか遠くの国の特別な話というような印象もあった。海外に高い関心を持つ生徒がいる一方で、英語に抵抗があって、外国への興味もなく、日本以外のことを知らないまま日本が1番と考えている生徒もおり、少しもったいないと感じることもあった。

（授業後）

外国に行かなくとも日本国内にもこういった事例があり、多文化共生のための行動が求められていることに意識が向いた。「神戸の街が外国とのつながりの大きな役割を担っていたということは嬉しいことだと思った。」というコメントもあった。ケーススタディでは、困っている日系人のために友達としてできることとして「日本語や漢字の勉強を手伝う」「家に呼んでご飯を一緒に食べる」「話を聞く」「特売日を教えてあげる」「相手が傷つかないように発言に気をつける」といった生活ベースで寄り添おうとする意見が見られた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	•伝えたいことがあまりに多く、内容を絞るのが大変だった。歴史を知った上で現状について考えてもらいたいという思いがあったので、前半でかなり時間を費やす形となった。 •入管法を取り上げようとしたが、2時間の授業の一部に組み込める単純なものではなく、どこまで伝えるかが悩ましかった。現代の日本が多くの課題を抱えていることであり、丁寧に取り扱う必要があると感じた。
2. 改善点	•今回は授業者が見聞きしてきたことが中心になったので、日系人のお話を直接聞く機会を設けたい。もっと探究的な取り組みも取り入れてみたい。 •持ち時間の関係で英語の授業内での実施となったが、内容が国際理解に偏ってしまった。日系について述べられた英語の資料を読ませたり、英語で意見を述べさせたりしたい。 •内容が盛りだくさんで、翌日に持ち越した部分もあった。分割し、各活動にもっと時間をかけて生徒の考えを深掘りすればよかった。 •「整理」「整頓」「清潔」などの日本語が日系人学校で使われている写真を示したが、広く外国語に触れるきっかけを与えるべく、次はスペイン語を合わせて紹介したい。

3. 成果が出た点	•「ペルーに行ってみたい」「こんな国もあるんや」「他の国についても知ってみたい」という声が上がり、海外への興味を引くことができた。 •日系社会を知ることで、自分たちの中に根付く日本の良さに気づいてもらうことができた。 •多文化共生のために自分たちには何ができるか、どんな社会であってほしいか、ということを考える場を生み出せた。
4. 備考 （授業者による自由記述）	日系人というテーマのおかげか、普段は外国に興味を持てない生徒も親近感を抱くことができたようだった。未知なるものや自分と異なるものへの抵抗を持つ生徒は多い。しかし、少しでも繋がりを見出すことができれば、グッと身近に思えることを今回実感した。生徒たちが知らない世界に一歩踏み出し、人との違いを個性やよさとして感じられるきっかけ作りをしていきたいと思う。 今回の教師海外研修は授業者にとって初めて国際理解教育に深く関わる機会となった。他の参加者の方から学んだことが非常に多くあり、とても感謝している。ペルーで経験したことを元に、これからも情報をアップデートしつつ、積極的に国際理解教育に取り組んでいきたい。

添付資料:

・JICA九州（2022）「多文化共生ってなんだろう?」
（https://www.jica.go.jp/domestic/kyushu/office/pr/index.html）
うち、本時で使用したのは「ワークシート　ケーススタディ4」
・愛知県（2023）「みんなでつくろう多文化共生社会」
（https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/tabunkarikaikyozai.html）
・外務省（2018）「日本と中南米をつなぐ日系人」
・出入国在留管理庁「令和4年末現在における在留外国人数について」
（https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html）
・細谷広美（編著）（2012）『ペルーを知るための66章【第2版】』明石書店

参考資料:

・石川達三（2014）『蒼氓』秋田魁新報社
・外務省「ペルー共和国」
（https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/index.html）
・木下理仁（2019）『国籍の?（ハテナ）がわかる本　日本人ってだれのこと?外国人ってだれのこと?』
太郎次郎社エディタス
・松田真希子（編著）（2022）『「日系」をめぐることばと文化　移動する人の創造性と多様性』くろしお出版

※各ウェブサイトの最終閲覧日はいずれも2023年12月10日

【ワークシート1】

PERU WORKSHEET #1

【資料1】移民会社が仲介役となって、希望者790名が4年間の労働契約を結んでペルーへ渡った。移民会社の勧誘によれば、日給が1円以上保証されているので生活費を差し引いても、契約期間で約800～900円の貯蓄をして帰国できるというのがうたい文句だった。ちなみに、当時の日本の賃金相場では、大工の日当が50銭であった（では、実際に当初の契約通りの1ヶ月25円の労賃が支払われたのかというと、農園によって待遇はまちまちだった。さらに、労賃は支払われても農園直営売店で不当に高い食料を買う以外にない状況に追い込まれるような農園もあった）。

【資料2】第1回の契約移民の苦労は、日系人にとって自らのペルーにおけるルーツを確認する「物語」として語り継がれている。（中略）…外国から言葉も知らずにやってきて、最底辺の労働者から身体ひとつで立身出世を遂げることができるかどうか。一人ひとりの努力と運とに大きく左右されながらも、確実にペルー社会の一部になってきた

【資料3】

【資料4】

↑校長室で発見

← 学校の階段
（右側通行を示す矢印もあり）

↓訪問時の集合写真